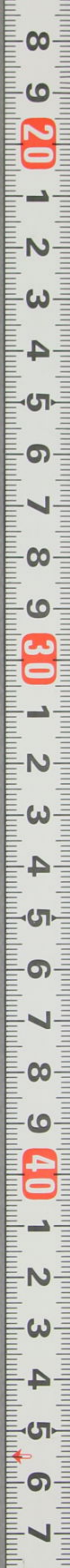




風俗文選通釋

廿一  
廿二  
辯  
表

入到  
4218  
9



五利  
號 4218  
卷 9

風俗文選 通釋卷之五

詩歌雜詠 卷之五

定九後辯

九考

世之

卷

風俗

卷

風俗文選 通釋卷之五

風俗文選 通釋卷之五

風俗文選 通釋

辯表

世之二

風俗

此風俗文選通釋卷之九  
 余安政五年季子築地卯  
 在勢中——書寫了而合冊  
 力十本 蘇 外 又



風俗文選通釋卷之九

詩歌詠詰辯 犬村

定先後辯

支考

豆腐辯

許六

天狗辯

木尊

手足辯

茂村

人參辯

許六

射御辯

許六

卷之九

辯類

辯ハ辯と同ノ物ハ辯定シテ詳小トモノ意ヲ明

トシテ其ノトモノ意ハ分別シテ其ノトモノ意ヲ明

トシテ

詩歌詠詰辯

此篇詠詰ハ中亦以下ニ道不立ニシテ詩歌ノ意ヲ明



しるし

先和歌の徳しるしに誰かあましし上代より傳へたる人の心は  
種とすらまゝあましし徳より傳へたる鬼もつら男も頂の  
きりくは通し其種柳をくくしきまの人の夜討つやふ帯  
笈きくくししと轆の中ふしきくくくしき侍白丁等しく  
敬言よまほひ住むる御侍等とくきくくくくくくくくくく  
御の徳ありけりしを御しよら御しよら御しよら御しよら  
酒のとき屋の夕暮をまてくくくくくくくくくくくくくく  
夜しよのときまてくくくくくくくくくくくくくくくくく  
客の座の腰のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
牛道唐の揚とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まくく官のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

しるし

此書の手を論し其のまゝのくくくくくくくくくくくくくく  
とくく神代のはくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
集巻のくく假名の序の御かめくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
増巻のくくくく

海士のあは小雛まきくくくくくくくく

聖くくくくくく伊豆のあり太平記十四巻云伊豆の序の  
おきくくく今東野七里山七里を御しよくくくくくく  
牛の唐の揚とくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

詩に云く「玉解自在」云々其の「玉解」の語は  
なり其の行の速なりけり其の多き計八匹の駿馬あり  
合さく細くありけり細く盤面を走らるる鞭  
と云ふ四方八極ありて況や其上の流山ありて後向り  
踏むを勿れ傳へて同と云ふ鞍の上を踏むりて其後  
た右にけしきあり鳴呼快なり如何き今是を兼  
めく多しハ柳尾ありけり

此長詩は湯と云く八匹の駿馬八周の穆王の御馬也  
拾遺記曰周穆王巡行天下驅八龍之駿馬一名絶地  
二名翻羽三名奔霄四名越影五名踰輝六超光七  
名騰霧八名挾翼盤面小走りまりハ其盤の上を走  
せし四方八極ハ四方八音と云く如く是詩の自在り

と云く也但玉解はさしりるまきりけり詩の自在  
愉快と云はける物と云く今其愉快の自在り  
ゆえに多しハ柳尾ありけり其の多しハ其の多しハ  
御馬ありけりや其の多しハ杖杖鞋ありけり御馬あり  
と云く系田今を嫌ひしと云く其の多しハ其の多しハ  
押道陽老の芝系と云く其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
士高と云く其の多しハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
の曉ハ木の根老と云く其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
と云く其の多しハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
の門背ハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
と云く其の多しハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ  
せらりけり其の多しハ其の多しハ其の多しハ其の多しハ

茶の倦ツレ——大の氣の赤波——後と表すの同多三

此首細語の凄情とし其風雅の即て詩歌のまじり  
るのこころ詩人歌人の心——此の非と無別々の  
詞と古詩との習字のまじり考へて考へて考へて  
やうに細くせよの意をせん後者のまじりハと判別  
は表のまじりとの別をせしむる也

定先後辯

支考

此篇の東西夜話井波遊歴のめり論と題せる文章  
るは林紅嵐者の先後の得失を辯する故に辯は  
出せらく二人共の井波の風客と

林紅法師——浪はまをせらるるゆへに吾るは物心  
まじりたる人あり——此の年を以て此の年を以て  
なり——此の年を以て此の年を以て此の年を以て  
湯のまじりたる人あり——此の年を以て此の年を以て  
梅の花と表すはまじりたる人あり——此の年を以て  
こころを細くせよの意をせん後者のまじりハと判別  
は表のまじりとの別をせしむる也

此書二人の先後のまじりたる人あり——此の年を以て  
赤ん坊のまじりたる人あり——此の年を以て  
かこころを細くせよの意をせん後者のまじりハと判別  
は表のまじりとの別をせしむる也  
海客の細くせよの意をせん後者のまじりハと判別  
は表のまじりとの別をせしむる也  
東花信のまじりたる人あり——此の年を以て





豆腐と粟はのちとあるはふ地をけとせんと其果の  
もふ秋の草の穂の尖と形へ一石のてくふ少成り  
ちい山の秋の穂の尖とやん

豆腐辨

件六

此篇辨豆腐之用也

豆腐はけりて時豆腐と云ふは二物と云ふ  
類あり甲は好て乙はきこま終計は是れなり  
こきしとてより少許は出せし世の豆腐は料理せられ  
昔豆腐は石臼をこしてなり果て今のは石臼ありぬ  
豆腐の製法はこきやん

此篇は豆腐の古き今のまじりて作るべしと云ふ事なり

昔は豆腐はこきしとて作る人の時なり豆腐は漢の  
淮南王劉安より作り始りし日也其法は石臼をこ  
すは好む時なり今も信じて日用の物なり  
甲は好て乙はきこま終計は是れなり  
豆腐はけりて時豆腐と云ふは二物と云ふ  
類あり甲は好て乙はきこま終計は是れなり  
こきしとてより少許は出せし世の豆腐は料理せられ  
昔豆腐は石臼をこしてなり果て今のは石臼ありぬ  
豆腐の製法はこきやん

此篇は今の好むふ用を献するなり





開闢二丁の三層の書ありていふる事一何れもさうき  
つと毎のつとる篇と

天狗辯

木尊

此辯天物の姿情を述べて他物なるよりさるる事とを  
いふも 沢係は其中よりいふ

萬の形つものよき事と画圖よりいふ故物なりと云ふ  
て物よりかはりしそへて繪く人を常々いふりて  
いふ所や天物知りの古法眼の正面の鼻より圍りぬ  
らむ

此は天物の画圖のよりいふ先代旧事神祇本紀云眼狹  
権尊猛氣満胸腹而餘化吐物成天狗神雄神而威

強其軀人身頭獸首也鼻長耳長牙長獸太怒甚荒  
雖大カ神乃懸于鼻投於千里雖強堅カ戈輒咋掛於  
牙壞作段尔每事出知無穩止名天逆雄尊吞天逆氣  
獨身生兒名天魔雄命生出天地间荒神逆神地增人祇化  
吟鬼等皆屬天魔雄命君事馳諸弱神逆思者起  
灾惱謗神師誅仙客不煩天尊造為不作煩善云云  
天物はつものつとるは天の逆の義とて天物は  
書てあふのつとるはつとるは天物のつとる  
しるものつとるは天魔は向りて天照を拜い言ふ神も  
つとるはつとるはつとるは天物なるは此天魔雄神の  
眷属とて木の系天物の魔民とて古法眼の筆の信  
房の畫像ハ鞍馬山の如意の眼よりいふと云ふ向の信

鼻が書くところからいふに、此者神祇尺教もあつて、人倫生類の教のついでに、他修のあつたは、多かる具なる世の人の我懐も、鼻よりいふに、天物よりいふに、松の本末、居の志、先んて、志を、所、山、位、好、都の秋の、なん、や、う、ま、世の、治、承、の、つ、ま、い、海、の、ま、の、世の、い、ふ、本、の、ま、天物、を、さ、さ、さ、さ、又、い、大、奉、り、ま、や、高、る、の、山、の、花、を、う、ま、ま、の、ま、お、ふ、ゆ、あ、つ、て、い、日、高、の、あ、ま、い、ま、い、ら、う、う、ま、世、の、ま、ま、た、な、あ、り、ま、

是よりいふに、天物のあつて、いふに、天物の、天、魔、命、の、あ、り、ま、と、神、祇、も、ま、り、ん、又、華、屋、純、離、世、同、言、曰、善、善、有、十、種、魔、業、忘、失、善、提、心、修、諸、善、根、是、為、魔、業、慳、惜、正、法、呵、責、法、号、衆、生、貪、求、利、養、為、人、説、法、為、非、罣、人、説、深、

沙汰、是、為、魔、業、此、經、文、天、物、迄、の、説、文、を、い、ま、り、佛、院、う、ま、り、ま、り、又、釋、教、を、せ、ん、人、又、我、執、權、慢、り、ま、り、名、利、を、求、む、と、魔、界、を、入、り、て、天、物、を、い、ふ、人、倫、を、せ、ん、佛、の、説、書、の、形、を、い、ふ、生、類、の、形、を、い、ふ、ん、是、佛、の、法、式、を、い、て、佛、修、の、為、に、能、き、る、ま、り、ま、り、

皇宮山、山、城、の、い、ま、り、ま、り、白、山、明、日、を、ま、り、ま、り、石、山、の、ま、り、房、一、名、采、術、太、師、を、い、ま、り、鼻、院、太、師、房、の、社、を、い、ま、り、神、祇、を、い、ま、り、真、濟、深、殿、皇、所、を、い、ま、り、深、殿、を、い、ま、り、鬼、魅、を、い、ま、り、其、天、大、天、物、を、い、ま、り、太、師、を、い、ま、り、忠、仁、の、娘、文、德、帝、の、所、を、い、ま、り、山、城、を、い、ま、り、西、北、里、を、い、ま、り、本、の、ま、り、天、物、を、い、ま、り、魔、を、い、ま、り、大、奉、り、八、初、列、吉、野、山、の、鼻、を、い、ま、り、山、の、ま、り、大、奉、り、の、



坂東ついで山王権現の崇拝ついで  
として創りて招きおたの海傍に  
さき新いまにひきあつて  
大龍寺又東の塔の初まう  
此天物の事作るべし天物  
るし弦女曾ハ相傳ふり  
皆ハ作らる法ハ作らるま  
して洛陽建行町あり六月  
恒例として世々女林人  
しるし古は酒造の平お  
うるは其言ふは人の馬殿

牛養殿の平洛物傳は昼の  
成るに被れりしは傳ふ  
おしよ天物の成るは江  
るは文章の成るは天物  
つう人洛の天物河は深  
異にせしは傳ふは天物  
しるしは傳ふは天物  
此は傳ふは天物  
るは傳ふは天物  
るは傳ふは天物  
るは傳ふは天物











病者に病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず  
病を治すに功を知らず病を治すに功を知らず

此言行六自之經驗不況して庸医の人を以て用  
わらざるの速しき事あるを以て沈病と病のや

はあはあ

我思ふ唐の漢の波と云の故百方の医書は唐人を以て記す  
方也蓋し金匱神方記す其國所記す唐人の書を

と云ふは川草藥の如く多し其業蔽は尾張の唐の  
抄すは其根の如く國を以てその名を以てしきり  
如く是は唐の何れかとおぼしき一医者唐の如く  
方印の作者が如く是を以て其國の如く其抄出の  
と云ふは其の如く唐の抄出の上は唐人の抄出  
高麗の抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
中川抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
是古人上の抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
より医書を以て其の抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
道は其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く  
其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く其抄出の如く



くは終る理屈よりいへば理屈地獄に墮つる事  
此書よりいへば文意がけりて医者の用いある事  
又此書よりいへば虎と云ふ事と書く女はねと云ふ  
いへば医論よりいへば人老の聖薬といふ事  
其的當の用い方を知らばたゞ人老をいへば  
教をいへばの如くは是理屈其理屈は  
海の素人下せしむる如く唐の如くは理屈  
をいへば地獄に墮つる如くは此理屈  
支那の如くはいへば人老唐の如くは  
理屈よりいへば理屈の如くは  
一々理屈の如くは是は四春衆方規非の如くは  
くは素問の如くは理屈の如くは相名の前は

理屈をいへばと云ふ文意がけりて  
くは理屈の如くは其理屈の如くは  
朝鮮人老の如くは病の如くは唐の如くは  
くは素問の如くは

くは霍乱の聖薬といへば病の如くは名人の如く  
百年の後意理屈といへば理屈の如くは人老  
くは

此書よりいへば方々の如くは結核の如くは霍乱の聖薬といへば  
くは病の如くは病の如くは病の如くは病の如くは  
くは病の如くは病の如くは病の如くは病の如くは  
一般の如くは又医者の如くは病の如くは病の如くは  
此書よりいへば理屈の如くは病の如くは病の如くは

























一々君の侍のときよの意也又云此篇文意徹底長  
解一々まのり許六々子癖のて本調の女の  
まのり唯此篇のみわの例の白煙の文中は  
一々るる傍の一文章の艶麗の用いしは

風俗文選通釋卷之廿一 終

風俗文選通釋卷之廿二

雨乞表 許六 嘲佛骨表 其角  
讀佛骨表 厚為 陳情表 支考

表類

表ハ釋名曰下言於上曰表蔡邕獨斷表者不需  
頭上言臣某下言臣某誠惶誠恐頓首といふ文選  
李信表ハ明るく標あり物の標のよと云謝表  
賀表進表のれ四六の文法は用め又敬文も  
わつ既劄子上書の類も又りる上言ふの事類  
ちる又對策の其体自ら異なる表又頓首  
謹言と言を所んくを御さると蔡邕獨斷又  
より取舎なく其何れ得べき







朝佛骨表

其角

古文傳類准讀孟嘗君傳之例此篇韓愈の佛骨表  
 と物々として文章多うは上言の表は河内に於て古文  
 後孟嘗君傳として一篇は佛の教を因りて其制は長  
 表の對の目と申すは祖庭事苑卷四云元和十五年正月丁  
 亥迎鳳翔法門寺佛骨至京師留禁中三月唐書韓愈  
 傳曰愈字退之鄧州南陽人憲宗迎佛骨入禁中三日  
 乃送佛祠王公士人奔走膜唎至為夷法灼體膚委珍  
 貝騰沓係路愈聞惡之乃上表乃貶潮州刺史云憲  
 宗佛骨之迎て尊尚と甚意長壽所祈とあり韓愈佛の  
 事は佛のゆるりて其言と其惑の破る其相處の義に  
 其角甚表の河内に於て此文の作ること

し一韓退之表は佛骨の形を今象するに後て  
 追てかゝる人死して骨をるるを骨朽す土に歸る佛骨  
 何の生處をききむ佛骨一人の穢と會釈の皮骨ハ  
 朽くはけりて一人の骨の是れ會釈人よ及を以  
 夫束帶のやうに象骨をきやとい珍重の物也  
 虎豹の皮はぬと酸電甲ハ并ははくして尾毛ハ骨の用  
 める鹿茸牛角麋の鬃の類は宮室の飾と器物に  
 造るべきに醜はかたて吊と固一雜子の洞殼燕雀の  
 唾や糞や膠やよと追て佛骨ハ骨一會釈の  
 骨やよと申すは何の汚きや若佛骨細子の多とけり  
 たりびとよと申すやく疾鬼よわくして漢のよとせらる假令  
 佛骨の鬼かりと虎の革の擲鼻禱ハ死べとて水

後と云ふつゝと云ふの

「つゝ」ハ蠅をおくり 韓退之

此篇佛骨をとり余疑ははと佛骨の王位をけり

さん云退之曰況其身死已久枯朽之骨凶穢之餘

豈宜以入宮禁云此法のつゝと云ふは珍重ハ云

つゝと云ふ

つゝと云ふ疾鬼をとり云云物多洛東泉涌寺舍利殿の如きハ

佛骨の舍利之二重の金箔を敷きと此佛骨の中より佛

涅槃の入りと云ふハ罪刹足疾鬼のつゝと云ふは佛

骨を掠奪するつゝと云ふは章敬天皇御代ハ死つゝと云ふ

は敬して多しと云ふハつゝと云ふは佛滅後一ハ云ふは佛

骨を掠奪するつゝと云ふハ大唐白蓮寺僧道宣律師

授け玉ふハ泉涌寺の用山徳法法師の末井港海

入定ハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

足疾鬼のつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

潜秘多し韓愈ハ云ハ痛表ハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

つゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハつゝと云ふハ

あゝい初漢も同し改て伊特冊多秘をりてこれと  
伊特諾多其けりてききとていふは是神成るは俗  
なり其角みたるは佛骨の會教を以て汚穢の心と  
なりと云其國法を破る罪重なりと云るは凡世は何れ  
もこれ非とするやいふべきものありは唯韓道とて  
佛骨の福なり表封し惡口罵詈して愉快とて  
其美は古人と看破すとの蕉門の按て所違て之  
法の他佛師といふは且韓愈の儒家者流といふ  
天子の御する佛骨の嘲諷するの北紀ありや嚴正  
其進御するべきは福なり正徳の表はゆる韓退之  
表の事にして佛骨の何れをいふ又其事記の三つは  
其表の誤後せる文盲者の事と云ふも是蕉門後

變風を興し蕉門は齟齬をいふるより宜らうとて  
其角許六聖賢とていふ子作のいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの  
いふ事なるのいふ事なるのいふ事なるの

讀佛骨表

厚為

此篇佛骨の表にして何れの表に後なる者なり  
讀佛骨の表にして其角の文章にして後佛骨  
表のいふ韓愈の表にして其角の文章にして

一 詳るゝの歌を但韓を其用う文はうみ厚なり  
日切の信する如佛骨のよわらふや

佛骨の西域の人を骨也漢土にびくも中を其骨  
昆蟲の足実なるなりとも是を厨子と見たり  
かろう強<sup>ヒヤ</sup>下<sup>ヒヤ</sup>なりぬれい<sup>ヒヤ</sup>大<sup>ヒヤ</sup>用<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>目<sup>ヒヤ</sup>を<sup>ヒヤ</sup>新<sup>ヒヤ</sup>  
うい<sup>ヒヤ</sup>を<sup>ヒヤ</sup>作<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>は<sup>ヒヤ</sup>云<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>打<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>は<sup>ヒヤ</sup>云<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>

かゝる佳の舍利よりぬき過るなり  
此篇佛骨を憐れむの意に巨屠昆蟲は足実なり  
るゝの程の佐物多きなり其<sup>ヒヤ</sup>中<sup>ヒヤ</sup>より<sup>ヒヤ</sup>石<sup>ヒヤ</sup>受<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>た<sup>ヒヤ</sup>り  
之に但韓を其用うて虚能く佛骨の擲るの詳  
此文清規もいへば清<sup>ヒヤ</sup>海<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>き<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>あり<sup>ヒヤ</sup>に

陳情表

支考

美濃國山縣郡在三輪明神社清輔袋雙紙記此神  
詠東華坊作文奉此神云思謂借用李令伯之表  
題號二耳

此の序全<sup>ヒヤ</sup>詳<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>書<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>如<sup>ヒヤ</sup>在<sup>ヒヤ</sup>に<sup>ヒヤ</sup>あり<sup>ヒヤ</sup>を<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>へ<sup>ヒヤ</sup>り  
大學の三綱領の在の<sup>ヒヤ</sup>も<sup>ヒヤ</sup>も<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>文<sup>ヒヤ</sup>音<sup>ヒヤ</sup>者<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>書<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>へ<sup>ヒヤ</sup>り  
い<sup>ヒヤ</sup>へ<sup>ヒヤ</sup>り<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>在<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>も<sup>ヒヤ</sup>も<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>山<sup>ヒヤ</sup>縣<sup>ヒヤ</sup>郡<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>三<sup>ヒヤ</sup>輪<sup>ヒヤ</sup>明<sup>ヒヤ</sup>神<sup>ヒヤ</sup>社<sup>ヒヤ</sup>  
あり<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>文<sup>ヒヤ</sup>義<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>三<sup>ヒヤ</sup>輪<sup>ヒヤ</sup>明<sup>ヒヤ</sup>神<sup>ヒヤ</sup>社<sup>ヒヤ</sup>の<sup>ヒヤ</sup>あり<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>思<sup>ヒヤ</sup>謂<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>  
清<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>考<sup>ヒヤ</sup>へ<sup>ヒヤ</sup>り<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>  
情<sup>ヒヤ</sup>表<sup>ヒヤ</sup>蓋<sup>ヒヤ</sup>用<sup>ヒヤ</sup>其<sup>ヒヤ</sup>題<sup>ヒヤ</sup>号<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>  
密<sup>ヒヤ</sup>蜀<sup>ヒヤ</sup>人<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>  
食<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>し<sup>ヒヤ</sup>と<sup>ヒヤ</sup>い<sup>ヒヤ</sup>ぬ<sup>ヒヤ</sup>一<sup>ヒヤ</sup>也<sup>ヒヤ</sup>





上座のちて新のちてふるく——  
此のふのちてふるく——  
あふちてふるく——

此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——

此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——

あふちてふるく——  
あふちてふるく——  
あふちてふるく——  
あふちてふるく——

此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——  
此のちてふるく——

あふちてふるく——  
あふちてふるく——  
あふちてふるく——  
あふちてふるく——



日集抄とみ人下り

木のらうらうのりくは新をたてつゝの秋はまらう

いよのねあはれあふまの都あつた川に流るる言を序

枝はらうは成るるの世をたつゝの秋はまらう

もまのあけのこをいひつゝの秋はまらう

人の命のまらうをいひつゝの秋はまらう

世の人をいひつゝの秋はまらう

彼のまの徳をいひつゝの秋はまらう

人はいひつゝの秋はまらう

いひつゝの秋はまらう

まらうの秋はまらう

秋はまらう

仰せの命はつゝも四時のまらうをいひつゝの秋はまらう

此のまの徳をいひつゝの秋はまらう

世の人をいひつゝの秋はまらう

彼のまの徳をいひつゝの秋はまらう

人はいひつゝの秋はまらう

いひつゝの秋はまらう

まらうの秋はまらう

秋はまらう

秋はまらう

秋はまらう

秋はまらう

支考の文章の曲優五復其自在なるが故に、  
其の文章の曲優五復其自在なるが故に、

風俗文選通釋卷之廿二終

